

冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議 第2回アスリート部会 議事録

日時： 平成 28 年 12 月 13 日（火） 15：00～16：40

場所： ニューオータニイン札幌 2階 北星の間  
（中央区北2条西1丁目1-1）

出席者：

○部会長

スキー・ノルディック複合 阿部 雅司 委員

○副部会長

スケート・スピードスケート 鈴木 靖 委員

○委員

スキー・アルペン 川端 絵美 委員

スキー・フリースタイル（モーグル） 山崎 修 委員

スケート・スピードスケート 深澤 雅子 委員

カーリング 佐藤 浩 委員

バイアスロン 出口 弘之 委員

欠席者：

○委員

スキー・アルペン 滝下 靖之 委員

湯浅 直樹 委員

スキー・クロスカントリー 石田 正子 委員

夏見 円 委員

吉田 圭伸 委員

スキー・ジャンプ 須田 健仁 委員

原田 雅彦 委員

スキー・ノルディック複合 加藤 大平 委員

富井 彦 委員

森 敏 委員

スキー・フリースタイル（エアリアル） 工藤 哲史 委員

逸見 佳代 委員

スキー・フリースタイル（モーグル） 坂本 豪大 委員

里谷 多英 委員

スキー・スノーボード 上島 しのぶ 委員

村上 大輔 委員

スケート・スピードスケート	及川 佑 委員
	大菅 小百合 委員
	太田 明生 委員
	三宮 恵利子 委員
	長島 圭一郎 委員
アイスホッケー	平野 由佳 委員
	米山 知奈 委員
ボブスレー／スケルトン	稲田 勝 委員
	桧野 真奈美 委員
リュージュ	牛島 茂昭 委員
	戸城 正貴 委員
カーリング	石崎 琴美 委員
	近江谷 杏菜 委員
	船山 弓枝 委員
	松沢 美香 委員
	本橋 麻里 委員
	吉田 知那美 委員
バイアスロン	風間 淳 委員
	菅 恭司 委員
	鈴木 李奈 委員
	立崎 芙由子 委員
	目黒 宏直 委員
スキー・アルペン（パラリンピック）	狩野 亮 委員
スキー・クロスカントリー（パラリンピック）	加藤 弘 委員
アイススレッジホッケー（パラリンピック）	永瀬 充 委員

次第：

1 開 会

2 報 告

- (1) 第1回アスリート部会の意見要旨について
- (2) 開催提案書の提出について
- (3) アスリート部会の活動方針について

3 議 事

冬季版総合ナショナルトレーニングセンターについて

4 閉 会

《配布資料》

- 資料 1 冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議 第1回アスリート部会 意見要旨
- 資料 2 冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画（案）に係る当初案からの変更について
- 資料 3 2026 北海道・札幌オリンピック・パラリンピック冬季競技大会 開催提案書
- 資料 4 2026 北海道・札幌オリンピック・パラリンピック冬季競技大会 開催提案書 資料編
- 資料 5 冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議アスリート部会 活動方針
- 資料 6 冬季版総合ナショナルトレーニングセンターについて

発言者	発言要旨
1 開 会	
事務局	<p>開始時間となったので、冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議 第2回アスリート部会を開催する。</p> <p>ウィンタースポーツシーズンが到来し、公私共に大変忙しい中、集まっていたことにお礼申し上げます。</p> <p>8月22日には第1回アスリート部会を開催し、その際にいただいた意見を反映して作成した開催提案書を11月8日に日本オリンピック委員会（JOC）に提出した。</p> <p>現在、JOCにおいて2026年大会立候補に向けた検討が行われている状況であるが、北海道・札幌の招致について、今後も支援・協力をお願いしたい。</p>
2 報 告	
阿部部会長	報告事項について事務局より説明をお願いしたい。
事務局	(事務局から資料1～5について説明)
阿部部会長	事務局から説明のあった内容について、ご質問はあるか。
鈴木副部会長	活動方針にあるオリパラ教室への参加について、現在も教育委員会と北海道オリンピック・パラリンピアンズが連携しており、今年度は28校へ行っているが、この活動ともリンクしているのか。
事務局	<p>すでに教育委員会がオリンピックズキャラバンやオリパラ教育推進事業を行っており、今後は参加するオリンピック・パラリンピアンズを広く広げていきたい。</p> <p>また、札幌で開催された国際大会等のPR展示を行っていたウィンタースポーツミュージアムをオリパラ学習の場としてオリンピックミュージアムにリニューアルするので、この活動にも参加していただきたい。</p>
鈴木副部会長	小中学校以外にも高校にも行きたいので、北海道としっかり連携してほしい。
事務局	現在は小中学校や市立の高校を対象に行っているが、道立の高校についても北海道と連携していきたい。

川端委員	<p>冬季アジア札幌大会のボランティアに道立高校が参加予定である。先日行われた日本アンチドーピング機構のセミナーでは市立の清田高校や平岸高校に協力してもらったが、道立高校はうまくいかないことが多く残念であるという意見もある。</p> <p>地方の学生は市町村が小さいほど、学校は閉校に追い込まれており、卒業後に都心の大学へ進学する状況でもなく、何を目標とするかという悩みを抱えているので、何らかの形で関われないかと考えている。都心と地方の学生が接する機会を増やして輪を広げられるきっかけとなる取り組みを行いたい。</p> <p>ある高校では「ボランティアで何をするか」をテーマに講話やワークショップを行ったところ、普段授業を聞かない生徒や学校に来ない生徒もきちんと参加するなど、徐々に変化が出るようになった。</p>
鈴木副部長	<p>小中高生はオリパラの話聞いて感動や理解はできるが、行動することができない。行動力の高い大学生にも講義を行うなど、積極的に関わっていききたい。</p>
事務局	<p>今年度はオリパラ招致の気運醸成として大学生がオリパラ計画について提案する「オリパラボ」というワークショップを開催しており、川端委員には審査員として参加していただいた。</p> <p>また、大学からオリパラをテーマとして学生にまちづくりを考えさせるための依頼があり、札幌市立大学や北海道大学の新渡戸カレッジ、札幌国際大学、札幌大学などで講義を行った。</p> <p>2026年招致の成否に関わらず、来年度以降も同様の取り組みを継続する予定である。</p>
川端委員	<p>オリパラボでは学生と若い建築家が協力して、狸小路の活性化や自然に戻る選手村など様々な発想があり、作成された完成度の高い模型やポスター、CMはチカホで展示していた。普段はスポーツのことを考えない学生にオリパラという題を与えることによって、オリパラに興味を持ち、考えるきっかけとなった。</p> <p>高校生や大学生に講義を行うことで大人とは違う観点からのアイデアが出てくる。</p>
佐藤委員	<p>先につながる数年後に向けた取り組みを行っていききたい。</p>

川端委員	<p>地方大会でのボランティア不足が道内の課題である。笹川財団ではボランティアに関する様々な研究を行っているが、関東周辺と同じ方法は札幌ですら成り立たないとのことである。</p> <p>ボランティアを一度で終わらせるのではなく、その経験を活かして、市内、道内を回るレガシーとなってほしい。オリパラ招致がボランティアの気運を高められるのではないかな。</p> <p>ある町ではボランティア登録の際に自身が所有する資格を登録することで、適した内容に従事できるため、円滑に運営がなされている。例えば、バスの運転による送迎や看板作成など。</p>
鈴木副部長	札幌にスポーツのボランティアを取りまとめている団体はあるのか。
川端委員	スポーツボランティアという団体があり、事務局の笹川財団が様々な研究や情報提供を行っている。札幌市でもボランティアの依頼を行っているのではないかな。
事務局	さっぽろ健康スポーツ財団が事務局となっている。
川端委員	<p>ボランティアなどの応援する側が不足しているので、北海道も本州の事例を参考とすれば、うまくいくのではないかな。</p> <p>今から始めなければオリパラ誘致した際に間に合わない。技術的な部分やそれ以外に支えるボランティアの人材が不足しているため、我々ももっと勉強する必要があるし、今のボランティアをつなぎとめなければいけない。</p>
鈴木副部長	<p>情報提供が重要である。東北の震災復興ではボランティア募集の情報がメディアなどから発信されていたので、多くの人が集まっている。</p> <p>スポーツボランティアも情報を発信する場が必要である。</p>
山崎委員	<p>自分がボランティアとして何ができるかが不安だと思う。</p> <p>1972年の札幌オリンピックではどのくらいボランティアがいたのか。</p>
事務局	<p>正確な数字は把握していないが、相当な数であった。</p> <p>来年2月の冬季アジア大会では4,500人がスマイル・サポーターズとしてボランティア登録している。冬季アジア大会だけでは、今後開催さ</p>

	<p>れる大会などでも声をかける予定であり、先日の日本ハムファイターズの優勝パレードでも協力していただいた。</p>
川端委員	<p>情報を発信することによって自分には何ができるのかを考えている人々がボランティアとして活動することができる。継続してもらわなければ、大会を支えるボランティアが不足してしまう。</p> <p>ある町ではマラソン大会のボランティアにファミリー単位で登録できるなど登録方法の工夫をしている。人数以外にも日数や活動内容などをフレキシブルに募集することもできるのではないか。</p> <p>スキーやスケートは寒さなどの特殊な環境でのボランティアなので、工夫しなければならない。</p>
鈴木副部長	<p>会場が大きいスキーやスケートは数百人のボランティアが必要であるが、カーリングなどは会場の大きさからも多くの人数は必要ないのか。</p>
佐藤委員	<p>冬季アジア札幌大会はどうぎんカーリングスタジアムで行うので、そこまで人数は多くないが、過去に行った世界選手権の際には多くのボランティアに協力していただいた。</p>
鈴木副部長	<p>様々な団体がオリパラを通じて同じ方向で活動できれば素晴らしい。</p>
山崎委員	<p>1972年にボランティアとして参加した感動や経験を語りたい人がいるかもしれないので、そういう場を設けてもいいかもしれない。オリンピックは選手だけではなく、ボランティアにとっても大きな経験となる。</p>
鈴木副部長	<p>北海道や札幌にはオリパラを生で観戦したことがある人は少ないので、その感動を肌で感じている我々が何らかの形で伝えたい。</p>
川端委員	<p>最近のオリパラでは種目数が増え、観客総数は増えているが、種目ごとの観客数は減少している印象である。宿泊施設の不足やチケットが買えない、セキュリティ強化による観客席数の減少などが原因である。トリノ大会では多くの観客が予想されたが、自国が強い競技ですらあまり集まらなかった。</p> <p>テロ後にはセキュリティが一層強化され、コースの間近で見られなくなるなど観戦エリアも小さくなり、観客も足を運ばなくなってしまった。</p> <p>札幌には1972年を経験しているレガシーがあるので、生で観戦できる</p>

	<p>感動をもう一度味わえるということアピールの方がいい。</p> <p>映像に力を入れる時代ではあるが、スポーツの原点は生の観戦ということを発信して、チケットの販売方法なども検討するべきである。</p>
<p>冬季版総合ナショナルトレーニングセンターについて</p>	
阿部部会長	<p>意見交換の前に冬季版総合ナショナルトレーニングセンター（NTC）について、事務局より説明をお願いしたい。</p>
事務局	<p>冬季版総合 NTC について説明する。 （資料 6 について説明）</p>
阿部部会長	<p>事務局から説明のあった内容について、ご質問はあるか。 （質問なし）</p>
<p>意見交換</p>	
阿部部会長	<p>これまでのオリパラ出場経験等を踏まえて、各競技力の向上に向けた現状の課題や課題解決のために不足している機能、NTC に必要なトレーニング機能などの意見をいただきたい。</p>
川端委員	<p>東京の NTC や国立スポーツ科学センター（JISS）は夏季競技中心であるため、冬季競技のアフタートレーニングができる施設が必要である。</p> <p>冬季競技はその特殊性から施設が点在しており、それぞれにトレーニング施設を整備すると重複してしまうので、1 箇所に全てまとまっているのが理想的であるが、バランスが難しい。</p> <p>海外遠征や東京での検査や測定の手間が省けるため、整備してほしい。</p> <p>スキー・アルペン競技は国や都道府県が運営するスキー場がなく、民間スキー場を利用しているため、協力がないと練習ができない状況である。スキー場は一般客も利用するため、水撒きやコブの作成など自由に利用できない。ザウス（ららぽーとスキードームザウス）の様な屋根付きで国立のコースを整備してほしいという希望的観測はある。</p> <p>もちろん非公開の練習も必要であるが、東京の NTC は少し閉鎖的なので、選手だけではなく一般の人でも利用や講座の受講、トレーニング風景の見学などができる施設としてほしい。</p>
鈴木副部会長	<p>スキー・アルペンの強化拠点が無いのはなぜか。</p>

阿部部会長	ジャンプやノルディック複合などは強化拠点がある。
川端委員	<p>他の競技の施設は自治体が所有しているが、スキー場は民間が所有しており、ニセコのようにコースごとに運営主が違うこともあるため、強化拠点としての指定が難しい。</p> <p>競技選手だけが利用していると一般客から文句が出てしまい、道内の高校生も限られた場所で練習している。滑降コースのような長いコースを借りるには、費用が多額に必要となるため、地の利を生かした練習を積むことは、長野五輪、雫石の世界選手権ではできなかった。</p> <p>大会を行う際も一般客との共存を考えなければいけないので、競技者だけが利用する施設ではないことも原因の1つである。斜度などの練習環境に合うスキー場も限られている。</p> <p>オーストリアでは国技であるため、スキー連盟が所有しているコースがあり、一般開放もしながら、強化拠点として運営している。</p>
鈴木副部会長	スケートでは国から利用料を出して、選手専用の時間を設けているが、スキー・アルペンもコースを限定するなどできないのか。
川端委員	<p>規模が大きすぎるため、選手数によってはコース全てを利用しなければいけない。また、他の競技に比べて利用料金も高額であるため、使用料も高額となってしまう。</p> <p>小さくてもいいのでスラロームのコースを整備してほしい。</p>
鈴木副部会長	NTC と強化拠点の連携が重要である。
山崎委員	海外では冬季競技の NTC を整備して、成功しているのか。
川端委員	冬季競技は1年中練習できる環境が必要である。
出口委員	<p>まずは NTC の理想を挙げてから、海外の事例などを参考に実現性などを検討するべきである。例えば、大倉山のジャンプ場とばんけいスキー場を一体として整備するなど。雪上系と氷上系は分ける必要があるのかもしれない。</p> <p>バイアスロンが強い国は必ず NTC を持っている。海外の選手が利用したいと思えるような NTC とするべきである。</p>

川端委員	<p>バイアスロンも銃の取り扱いがあるので、自衛隊施設内でしか練習できないのか。</p>
出口委員	<p>国の土地を借りているため、ある程度の制限はある。</p> <p>クロスカントリーやノルディック複合、バイアスロンは一体化した施設にできると思う。</p> <p>海外は日本と違いシーズンがつながっているという考え方である。日本でもシーズンを通して練習できる環境が整備されると、まだまだ強化できる。</p>
川端委員	<p>日本人は海外遠征に頻繁に行けないので、その際には多少悪天候でも練習するが、現地の選手はいつでも練習できる環境なので、別のトレーニングをしている。この差はとても大きい。</p>
阿部部会長	<p>ラムソー（オーストリア）では夏でも毎週末に子ども達が練習しているので、冬に滑り込む必要がない。夏にどれだけ雪上で練習できるかが重要であるので、クロスカントリーのトンネルコースがあれば、強化につながる。</p>
川端委員	<p>海外遠征の負担が減少するなどのサポートがないとメダル数や競技人口は増えない。</p> <p>スケートは1年中利用できるリンクはあるのか。</p>
鈴木副部会長	<p>水に不純物が入り、滑りが悪くなるため、年に一度リンクを溶かす必要がある。帯広のオーバルは5～6月の2ヶ月間利用できない。</p> <p>カーリングはどうか。</p>
佐藤委員	<p>北見は1シートごと融かすので通年で利用でき、札幌は1シートごとに融かせないので、2ヶ月間利用できない期間がある。</p>
川端委員	<p>スケートは屋内と屋外の施設では違うのか。</p>
深澤委員	<p>もちろん屋外よりも屋内の方が練習しやすい。スピードスケートはスキーとは違い、陸上でのトレーニングがある程度必要である。夏は陸上トレーニングがメインで、感覚を確かめる程度にリンクを利用する。</p>

川端委員	夏でも滑られる環境があることはすばらしい。
鈴木副部長	オリンピック開催に対応したオーバルでは、リンクの周りが 700m あり、雪も融けないので、クロスカントリーのコースとして利用できるのではないか。
深澤委員	カルガリーのオーバルは内側にショートトラックやアイスホッケーのリンクがあり、他競技の練習を見ることで勉強や参考になる。 また、1箇所にとめることで施設維持費が抑えられるのではないか。
鈴木副部長	モスクワのオーバルは全面がリンクなので、どの競技でも対応可能である。
出口委員	東京の NTC や JISS では様々な競技が 1 箇所に集まり、様々な分析結果などを共有して、成果が出ているのは明らかである。冬季競技でも共通で研究できるものはあり、集約する必要がある。 クロスカントリーでもスケートのスケータリングを研究していたことがある。
川端委員	現在は競技ごとに研究を行っており、JISS でも研究することはできるが、冬季競技を理解している研究者は少ない。NTC は冬季競技専門の研究や情報収集ができる施設としてほしい。 アルペンも夏にはスケートでエッジワークの練習を行っている。
阿部部長	ノルディック複合では夏の間は 1 ヶ月ごとで JISS へ通って情報収集や測定を行っているが、札幌で行えるとかなりのメリットとなる。 また、現在 JISS を利用しているのはトップアスリートのみであり、札幌の NTC を地域の指導者が利用することで指導力が向上し、ジュニアの育成にもつながる。
川端委員	日本は島国なので、海外へ行きづらく、海外の知識を持つ限られた指導者が発信しても限界がある。競技を超えてジュニアの選手や指導者が頻りに情報交換できる場はとても重要である。
鈴木副部長	NTC が整備されるとスケートでは協力する企業が出てくると思われる。 ここ数年では中高生のメダル獲得選手のうち 80%が道内出身者だった

	<p>が、40%に下がっている。北海道から強い選手を輩出しているが、道外へ出て行ってしまい、トップアスリートを目にすることや一緒にトレーニングを行うことができないため、次の選手が育たない環境となっている。</p> <p>スケート王国である北海道に NTC を誘致して、再び強化すればメダル獲得にもつながる。</p>
<p>川端委員</p>	<p>インターハイや国体などに出場する選手も減少しており、種目によっては準備が大変だが、参加人数が少ないために開催したくないという自治体もある。</p> <p>スキー・ジャンプやアイスホッケーなどは開催できる施設が少ないため、受け入れが難しいという状況にもなっているので、野球の甲子園やラグビーの花園などのように冬季競技の聖地となる拠点施設を作るのもいいかもしれない。</p>
<p>鈴木副部長</p>	<p>今回の部会の開催を連絡したところ、シーズン中ということもあり 8割の選手が日本にいないとの回答であった。</p> <p>本日欠席しているパラリンピック・アイススレッジホッケーの永瀬委員からの意見を代読する。</p> <p>パラリンピックの競技人口は少なく、規模が小さいため、オリンピック競技や他の競技と連携して強化していきたい。</p> <p>オリパラ招致を目指すためには、地元選手が出場して活躍することが盛り上がりにつながるので、ジュニア世代の育成を視野に入れた施設としてほしい。</p> <p>アクセスが課題となるので、特に降雪期を考慮して検討してほしい。</p> <p>また、先日永瀬委員と会った際に話があったのだが、パラリンピックのトレーニング施設は東京にしかないのが、北海道パラリンピアン数十名のうち、2名以外は道外に在住している。札幌に冬季オリパラの NTC を整備することで、北海道で活動できるようにしてほしい。</p>
<p>出口会長</p>	<p>NTC が整備された際の維持管理や運営が課題となると思う。</p> <p>セキュリティ等の問題はあがるが、トップアスリートの練習風景を見学できるようにすると、人を集めることができるのではないかと。</p>
<p>鈴木副部長</p>	<p>練習日程をホームページで公開して、情報発信するべきである。</p>
<p>川端委員</p>	<p>JISS には学識経験者が研究を行っており、理論は理解しているが、冬</p>

	<p>季競技そのものを理解している人は少ないので、北海道出身のアスリートが研究者と意見交換を行える就職先としてほしい。そうすることで、子どもや高齢者などへのウィンタースポーツの普及活動も行える。道内に就職先がないため、帰ってこられないアスリートが多い。</p>
鈴木副部長	<p>冬季競技のトレーニングを研究しているのは道外の大学ばかりで、少しずれていると感じることが多いので、札幌の NTC と北海道の大学が連携して研究を行ってほしい。東京の NTC のように食の研究も行ってほしい。</p>
川端委員	<p>一般の人もアスリート食を楽しみながら、練習風景を見学できるようにするとウィンタースポーツとの距離が縮まり、海外のようなスポーツ文化に近づくのではないか。</p>
鈴木副部長	<p>海外では当たり前の文化を取り入れるためには、日本の常識を変えなければいけない。</p>
山崎委員	<p>昔は野球部が冬にクロスカントリーの大会に出ていた。冬季競技が中心ではあるが、大会等で利用しない期間に夏季競技が利用できるようにしてもいいのではないか。</p>
阿部部長	<p>最後に総括として意見をまとめさせていただく。</p> <p>冬季版総合 NTC が建設されることで、アスリートのトレーニング環境が非常によくなることが考えられ、その他にも選手や指導者の間で多くの交流が生まれることで互いに良い影響を与え、それぞれの競技力が更に上がると考えられる。</p> <p>また、市民や道民がトップアスリートを見て、ウィンタースポーツに触れる場面が増えることで、次の世代のアスリートを育成・発掘することにつながると考えられる。</p> <p>これらはまさにアスリート部会の活動方針と一致するものなので、アスリート部会としてサポートしていきたい。</p> <p>については、冬季版総合 NTC の誘致について、競技団体と連携を取りながら、アスリート部会として積極的に取り組みたい。</p> <p>また、必要であれば、我々オリンピック・パラリンピアンが直接スポーツ庁等の関係省庁に冬季版総合 NTC の必要性を訴えていきたいと考えている。</p>

	<p>先ほどの事務局の説明からもあったとおり、国においても冬季競技の競技力向上や活動拠点のあり方については議論が進められているところであり、なるべく早い段階でスポーツ庁等への要望を行いたいと考えている。</p> <p>そのため、事務局にはこれまでの意見を参考にいただき、具体的な構想案を次回の部会開催までに整理していただきたい。</p>
<p>4 閉 会</p>	
<p>事務局</p>	<p>ただいま阿部部会長から話があったとおり、本日いただいた様々な意見を基に事務局において冬季版総合 NTC の誘致に係る具体的な構想の素案を作成し、改めてお示しする。</p> <p>次回の部会は 1 月下旬ごろの開催を想定しているので、ウィンタースポーツシーズン中ではあるが、多くの委員が集まるように日程調整したい。</p> <p>冒頭に説明したとおり、JOC に開催提案書を提出し、国レベルのステージへ一段上がっているところである。</p> <p>また、11 月には冬季オリンピック・パラリンピック札幌招致期成会による「冬季オリパラ招致実現に向けた緊急総決起大会」が開催され、阿部部会長、鈴木副部会長を含むアスリートや経済界などの約 450 名に集まっていた。北海道・札幌の招致に向けた輪は確実に広がっていることを改めて実感している。</p> <p>2 月には冬季アジア札幌大会が開催されるが、オリパラ招致を目指す札幌市にとっての試金石であると考えている。</p> <p>チケット販売のチラシを配布している。</p> <p>この大会は 1972 年札幌オリンピックを超える規模の国・地域からオセアニアの参加を含めて、約 2,300 人の選手と役員が参加する。まずはこの大会を成功に導き、2026 年冬季オリンピック・パラリンピック招致につなげていきたいと考えている。</p> <p>また、IOC や IF などの各国の役員が参加するため、各会場を満員の観客で盛り上げたいと考えているので、周りの人々へ声掛けしていただき、一人でも多くの人に足を運んでいただき、生で観戦することで大会を盛り上げたいので、引き続きの支援と協力をお願いしたい。</p>